六度目の年男、「六段」を吹く

遠軽医師会
遠軽共立病院　梅　田　弘　敏（竹名:雪山）

「六段」と言っても、大方の反応は「何それ？」というところでしょうね。「六段の調」と言えば少しイメージが湧くでしょうか。これは箏曲の名曲で、江戸時代初期の八橋検校によって作曲されました。その後尺八との合奏曲として編曲され、現在では尺八の名曲としても知られています。

近年、グレゴリオ聖歌「クレド」との関連性を示唆する研究が発表され、日本音楽史に新たな光を投げかけました。二つの楽譜を見比べてみると、長さがぴったり重なるだけでなく、「クレド」の言葉の重要部分を、「六段」ではアクセントや変化をつけて音楽的に強調しているというのです。

日本の洋楽は明治維新前後に始まったというのが常識ですが、実はそれより300年以上前にキリスト教の伝来とともに導入されました。織田信長は日本人神学生によるビオラや鍵盤楽器クラボの演奏に耳を傾け、豊臣秀吉は欧州から帰国した天正遣欧使節の演奏と歌声を楽しみ、３回もアンコールしたそうです。そのころから西洋音楽は西日本一帯に広がりつつあったのです。

その後キリスト教の禁教・弾圧が行われ、付随する音楽も否定される中で、そのメロディだけが琴の器楽曲として残されたものの一つが「六段」である可能性があるようです。隠れキリシタンが密かに伝えた祈りの歌「オラショ」よりも、一層高度にカモフラージュした祈りの曲が「六段」であるのかもしれません。

小生と尺八との関わりは、ある日突然始まりました。忘れもしない2004年１月17日、数日間降り続いた記録的大雪が止んで、ようやく車が動き始めた日のこと。新都山流尺八竹林軒大師範・谷藤紅山先生の演奏会で聴いた尺八・シャクルートの音色に、深く感動させられたのがきっかけでした。

その前の年は小生還暦の節目の年でしたが、女房が悪性度の高い特殊型胃癌で手術を受けたり、仕事の上では北海道大学医学部の医師名義貸し事件に絡み行政処分を受けたりと、踏んだり蹴ったりの当たり年であったので、尺八とフルートの合体新楽器「シャクルート」によって奏でられる「津軽海峡冬景色」は殊のほか心に染みたものでした。

演奏会終了と同時に弟子入りをお願いし、１月25日には先生のお世話で素晴らしい尺八を手にしていました。実のところ、「シャクルート」を習うのが主目的でしたが、唇と楽器の接触点である歌口のコントロールこそ美しい音を生み出すための最重要点と説明され、尺八の練習から始めることになったのです。それから十年間、週一回のレッスンを欠かさず受けてきました。昨年（2014年）９月には新都山流尺八師範職格検定試験に登第し、山号「雪山」を頂きました。

フルートと尺八の合体楽器であるシャクルートも平行して練習を続けてきたお蔭で、フルート、尺八、シャクルートの三種類の笛が、老後の寂しさを慰めてくれそうです。

さて一昨年７月のこと、北大入学式の日以来の級友・仲紘嗣君が、琴の師匠だった御母堂の残した琴を生かして、札幌西高時代の同級生でもある琴の師匠について練習を始めたことを偶然知らされました。それがきっかけで、簡単な曲なら彼の琴と小生の尺八で二重奏を楽しめるのではないかと思い付き、翌月には早速最初の合奏を実現させました。彼が既に習っていた曲である「ふるさと」「祭花第二番」に尺八を合わせてみました。ピッタリとは行きませんでしたが、和音を作り出す楽しさは十分実感することができました。

「六段」合奏は最初から胸の中で暖めていた計画なのですが、実現したのは翌年の６月になってからでした。最初の「六段」はもちろんスイスイとは行かなかったのですが、２人とも練習すればかなりいいレベルまで行けそうな感触を残して終わることができました。

そして記念すべき10月25日、何回か回を重ねていた級友４人の同期会「春夏秋冬」の場で、練習の成果を披露することができました。聴衆は入宇田君と川口君の２人だけですが、それでもささやかながら２人の「第一回邦楽二重奏コンサート」ということになったのです（**写真**）。

六段全段の通奏はまだ無理で、とりあえず三段までの演奏になってしまいましたが、そこまでは山本邦山張りの演奏ができたと自己満足に浸っております。70歳を過ぎてからこんなことに挑戦できるのは、頭と身体がまだまだ捨てたもんじゃないということで、趣味を楽しみながら仕事も適当にという有り難い老後に感謝しつつ、６回目の年男の生き甲斐を追求して行こうと考えております。

演奏活動40年を迎えて

空知南部医師会
町立長沼病院
田　中　利　明

地域医療に取り組むため、長沼町に赴任して５年になる田中と申します。医学部入学後よりビオラを習い始め、卒業後は出張先にアマチュア・オケがあれば入団しておりました。今まで、函館市民オーケストラ、札幌市民オーケストラ、釧路交響楽団、小樽管弦楽団、小樽商大室内管弦楽団、ノルト・シンフォニカーに参加しました。小生も還暦を迎えることになり、これまでの活動の中で、特に記憶に残っている２つのエピソードにつきまして書かせていただきます。

一つ目は1980年11月に赴任先の函館で行われた演奏会です。中学時代の恩師の夫が中心となっている市民オーケストラに参加させていただきました。曲目はモーツァルトのフルート協奏曲第２番、交響曲第40番、ホルストの組曲「惑星」とかなり重いプログラムでした。函館は小生の生まれ故郷で、ブラスバンドの盛んなところですので、管楽器奏者には事欠かないようでした。しかし、弦楽器はかなりお粗末でした。恩師夫婦ともに音楽教師であったため、方々に声掛けしたようで、助っ人には教え子の東京芸大や桐朋音大などの学生が名を連ねていました。彼らから受けた刺激は強烈でした。何より楽器に対して自由（調性、リズム、強弱、音程も関係なくすぐ弾ける）だったことでした。当たり前といえばそれまでですが、初見とは思えない読譜力で、何回やらせても同じことができる。こちらは、♯や♭が３つも付けば指が戸惑うわけで、楽譜にポジションや指使いの書き込みをしても、演奏にかなりの困難を感じました。音符を目で追うのに精一杯で強弱を付ける余裕がなく、弾けるところは音が大きくなり、早いパッセージで目立つところは音がずれてしまいます。しかも、弾けるところはリズムや音程も取りやすく、どうでもいいところが多いのです。本番１週間前から彼らが参加すると、音楽は一変しました。鑑賞可能な演奏になったのです。

もう一つは、1986年の冬に道東の標茶高校体育館で演奏したベートーヴェンの交響曲第９番の第４楽章です。これは、標茶町の町民合唱団「あすなろ」からの呼び掛けで、中学生以上の標茶町民が参加し、独唱もすべて町出身者で行うというものでした。当時、釧路に赴任していましたので、釧路交響楽団として参加しました。合唱と合奏は別々に練習し、演奏会前日にバスで２時間半揺られて標茶に到着し、合同練習を行い、翌日本番というものでした。会場は標茶高校体育館でした。今から見れば、相当つたない演奏だったのではなかったと思われるのですが、独唱、合唱、オケも含め、皆さん一生懸命の大熱演でした。地元標茶のブラスバンドや北大交響楽団からの参加もあり、演奏会終了後の打ち上げは相当に盛り上がり、帰りのバスでは爆睡しておりました。

2000年より札幌フィルハーモニー管弦楽団に入団し、15年が経とうとしております。その間、札フィルはもとより、学生サークルの演奏会や当院近くの介護老人保健施設の敬老会にも出演させていただいております。今まで通りの活動が可能な時間も残り少なくなってまいりました。最近は残りの時間に悔いを残すことなく過ごせればと、団員公募の演奏会に積極的に参加しております。昨年は、北海道ベートーヴェン協会主催の交響曲全曲試奏会に参加しました。１日で全９曲を番号順に演奏するというものです。当然、第９番では独唱、合唱も付きました。休憩時間も入れて、10時間掛かりました。肩、顎が痛くなり、第７番あたりでは集中力も落ちてきたせいか、あるパートが落ちてしまいましたが、プロ演奏者でもなかなか経験できないことでした。今年は、江別市制施行60周年記念フェスティバルオケに参加致します。今後も体の続く限り、充実した演奏活動を送れればと思っております。駄文にお付き合いいただきまして、ありがとうございました。